せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一一〇号（一日発行）
平成十年十一月一日

年表で読む 古平の歴史

《18》

■古平・岩内間に道路新設

開拓使が置かれるようになって、産業も盛んになるに従って各地で道路の建設が行われるようになりました。

明治四年、古平出張所の鈴木少主典は、古平郡と岩内郡を結ぶ新道の建設を計画しました。

翌年二月、関口利勝使掌らに実地調査をさせ、開拓使に次のような上申書を提出しました。

「古平郡より岩内郡へ道路を切り開くことについて、鈴木少主典が出頭のときに申し上げましたところですが、二月に雪道を踏んで調査をいたしました。

別紙図面のように、岩内郡ハッタリへの道路については特に険しい場所もないようで、これにより古平、岩内の交通も便利になり、利用されていない土地も大いに開けるものと考えます。費用についてもおおよそ見積をしておりますが、工事にかかるようであれば、なお詳細な図面、見積を提出いたします。」

壬申（明治五年）三月

■山道建設の見積り

古平郡沢口より二股間　二里二五町（一〇・五キロ）

二股より小二股間　二里六町（八・五キロ）

小二股より登り峰間　一八町（二キロ）

峰通り　二五町（二・七キロ）

ふもとまで　一八町（二キロ）

ふもとよりハッタリ間　二里十町（八キロ）

ハッタリより岩内間平地　一里六町（四・六キロ）

ここまでの道、およそ十里と見積をしております。

費用は、道幅九尺（二・七メートル）、少々地ならしをして一間（一・八メートル）当たり二朱永三十五文、延べ十里で二万千六百間として、三千四百五十六両。

この計画は、開拓使の案として採択になりましたが、どうしてか実現はしませんでした。

■札幌～古平間新道完成

場所請負制が続いていた江戸幕府時代には、余市から古平までの道路は、ようやく人馬が通れる程度の山道と海岸沿えの道路しかありませんでしたが、明治六年八月、札幌から古平までの駅逓区間が次のように定められました。

札幌～銭函間　五里十町
銭函～小樽間　三里三四町
小樽～忍路間　四里四町
忍路～余市間　二里二町
余市～古平間　五里十町

これでみると札幌～古平間は二〇里二四町（約八〇キロメートル）ということになります。

この前年、明治五年の古平郡駅逓の記録が残されています。

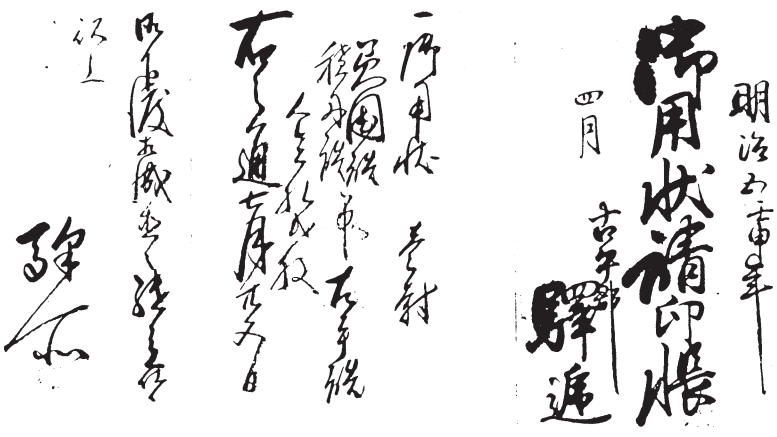
『御用状請印帳』古平駅逓

御用状　壱封
美国詰　御中
積丹詰　古平詰

右の通七月二五日御下渡相成直に継立仕候

以上

駅所



大正四年

4／19～5／20まで四日市から本州を旅行する

6／2　活動写真（映画）があるので、楽隊が町廻りをしいる。

6／7　行商が多く入ってきたが、鰊漁があまりよくないので不景気である。

6／9　衛生掃除の検査が十一日なので、天気もよく、町中が申し合わせたように大掃除をしている。四～五年前から古平でもずいぶんと行われるようになった。

6／12　小学校の運動会があり会場は万国旗で飾られている。十一時頃から雨で中止。（六月十四日、快晴、運動会ある）

6／15　第一回古平自転車競争が、花火を合図に始まる。三十回コースを回る競争で、小樽二人、古平一人が入賞する。子どもの三輪車競争もある。午後から五十回競争、竹浪と木村との決戦になり、手に汗にぎるおもしろさだ。木村選手が優勝、黒山の見物人であった。

6／19　余市通いの汽船一艘、発動機船一艘が本陣の浜から客を乗せて出るところ。船も一艘か二艘なら商売になるが、四艘が二往復では困るだろう。湯内沖にもう一艘が見える。

6／20　三山神社の祭礼、市中では浴衣を着ている人が多い。

高野名幸作さんの日記から

古平の生活を語る

【11】

7／3　リンゴは全滅、例年なら袋掛けで忙しいころだ。リンゴは不作、海産物は下落というので大不況だ。

7／6　汽船と発動機船の余市行きが今出るところだ。毎日よく客もあるものだ。浜はさびしい。共同干場のところへ女相撲が来るというので小屋掛けしている。

7／8　堀越丸が共同の前浜で剣舞、女相撲ら四、五十人の荷物をおろしている。小屋が三つできている。

7／11　この日、自分らにとっては忘るることのできない日だ。わが愛する妹さき子、突然の死亡。実に悲嘆にくるるばかりだ。

（この後、7／　30まで日記の記載なし）

7／31　大隈内閣総辞職のはり紙が町内に出る。

9／6　願雄寺の書画陳列会を見に行く。われわれにはさっぱりわからぬ。

9／8　美国への新道は実に便利で、交通上重要な道路である。荷馬車、客馬車も通っている。三、四年前から見ればずいぶん良くなった。

9／13　白米一俵五円二十五銭で売る。

9／19　古平公友会発会式が十時から小学校であり、弁当や冷酒が出る。三時ころ終わる。北海道銀行整理のこと新聞に出ている。

9／20　涼しい気候で気持ちよい。リンゴはなし、イカも漁無しでさびしい。

9／22　稲荷祭とかで煙火の音がする。

9／24　彼岸の中日で寺参りをする。ダリヤの黄、赤など取って来て供える。横山五平さんのところに寄って、ダリヤの珍しい花を貰って来る。

9／25　シイラが大漁、㊐で二十六尾獲ったといって一尾貰う。㊐おじさんが富丸で出発、招魂祭余興の剣道、相撲を見に行く。

10／3　古平～余市間航路、汽船一艘、発動機船三艘のところへ、本日から堀越丸一艘が加わるとのこと。何商売も競争はまぬがれない。

10／5　禅源寺の鐘楼を見に行く。まだ工事中だが見事なものだ。

10／6　八日、衛生検査があるので大掃除をする。近所でもみなやっている。

サンマさま

福井幸平

退院して、真っ先に食べたいと思ったのが秋刀魚（サンマ）である。大根おろしをたっぷり盛って味わった。老いて病気をしたりすると、退院後は何を食べてもおいしいものだ。サンマを三馬という珍しい古語があるそうで、三馬力ぐらいの力がつくからだろうと、これもたあいない想像から出たものらしい。

サンマが出ると按摩が引っ込むと、古くから言われていたのは、サンマの栄養価で病気もなおり、貧乏人にはもってこいの食餌療法とされたからだろう。

ちょっと栄養価を調べても、牛肉・鯨肉の缶詰などのはるかに及ぶところではなく、本物の牛肉と比べてもビタミンAが十二倍、カルシュウムが四倍、脂肪が旬のもので三倍、貧血に効くビタミンB12がなんと他の魚類の三倍以上、おまけに栄養価のないシシャモの十分の一の価格らしい。

しかし、むかしからイワシもサンマも同類で「魚中の下品なるもの」と、決めつけられている。今は七輪で焼かずにガスレンヂ焼くようである。この季節田舎では向かいも隣もみな、サンマを焼く煙が家中からもれてくるのもおもしろい。何といっても浜育ち、小さいころからサンマとかサバの目刺しなど身についた味覚である。

病気してからは食べ物への関心が深くなり、食べ物に感謝しながら食べているこのごろである。

私も『せたかむい』何かを書きながら、今日も楽しく、明日も楽しく、と元気で過ごしたいと思っている。

◇　◇　◇

初秋刀魚妻のせわしき夕仕度
箸の先焦がしつつ秋刀魚焼いてを
り
黒焦げに焼けて秋刀魚も気にならじ

定期船が消えて40年

明治時代 古平沿岸の海運

II

□合いの子船

日本海航路で活躍していた北前船（弁財船＝べざいせん）は、構造上から時化に弱く、また帆柱が一本だったので、後ろからの風のときは順調に帆走できたが、横風や向かい風だとまったく走ることができませんでした。明治十五年、政府は五百石以上の和船の建造を禁止しましたので、それからの大型船は西洋型となりました。

また、和船の中にも帆柱を二本にし、西洋型船のようにへさきに三角帆を張った和洋折衷型のものも現れました。こうゆう船を合いの子船と言っていました。

□船の大型化と増便

先の豊平丸は、明治十九年ころまで就航していましたが、「…豊平丸のような小型船ではなく大型船を就航させ、冬でも、月四、五回の定期航路を開いてほしい…」という、郡役所の文書も残されています。

古平～小樽間に定期船が運航されるようになったのは明治十九年のことで、一日一便でした。

□小樽～古平間に定期航路

明治二十五年、本州方面に不定期の航路を開いている、小樽の西谷回漕店が小島丸を運航して、毎日一便の定期航路を始めました。船は貨客船でしたが水産物の移出が主で、小樽からは米・みそ・しょう油などの日用品のほか、漁業関係の資材が多く入った来ました。

小樽は商業都市として次第に発展し、北海道の中心港でもあったことから、古平・小樽間の輸送もますます盛んになってきました。明治二十七年ころになると、古平や美国の船主が小樽から余市・古平・美国を回る不定期船を就航させるようになりました。

遥かなる故郷の思い出

追憶の記 ③

[50]

橘　義春

これほど佐藤清が淡谷のり子の熱烈なファンであるとは、彼にはシャッポを脱いだ。

私も佐藤清も、樺太での軍隊生活は三年目を迎え、昭和二十年八月の暑い夏の日に、上敷香町の泉部落の山の中で対米陣地構築に汗を流していた。

八月九日、ソ連軍の大部隊が突如として、北緯五十度線の国境を突破して侵攻して来た。

私たちとしては、ソ連とは不可侵条約を結んでいるはずなのに、まさかとわが耳を疑った。中隊はすぐ動員準備にかかったがてんやわんやの大騒ぎとなった。ただちに中隊本部から命令が出て、私はラッパ手として初年兵二名を連れ、佐藤君は暗号兵として大隊本部要員に配属されることに決まった。そのころから空には暗雲がたれ込め、雨が降り出して来た。

私たち四人は、携帯テントを頭からかぶり、大隊本部まで二キロほどの道のりを歩いたが、私の頭の中には何かすっきりしないものがあった。どうも様子が少しおかしい。戦争が起きたというのに、ソ連軍の飛行機も飛んで来ないし、砲声もまったく聞こえない。山は静寂そのもので、浮き世の物音はなにも聞こえてこない。

「こんな戦争ってあるのかナ」実感が全然わいてこない。いつもながらの非常呼集か、大掛かりな部隊移動演習でも始まったのではないか、などと考えながら、泉部落の入口にある大隊本部に到着した。本部では、雨の中を移動準備でごった返していた。そこへちょうど知り合いの浮穴曹長が来て、

「いいところへ来てくれた。荷物の積み出しを手伝ってくれ」ということで、四人で手伝うことになった。その最中に佐藤君に、暗号兵として最前線の半田国境の陣地へ先発せよ、との命令が出た。暗号兵は、最前線と本部との暗号電報の解読をするという重要な任務があった。雨の中を、中隊で私たちのかつての教官であった大国中尉らと共に、トラックで出発した。

「橘、行って来る」

「佐藤、気をつけてな」

ただそれだけの会話であった。これが最前線の死地へ向かう、親友の彼と交わした最後の言葉となってしまった。

半田国境はその昔、女優の岡田嘉子と杉本良吉が、ソ連領に向けて脱走したという問題の場所であった。

半田国境で本格的に戦闘が始まったのは、八月十一日の午前十時ころであった。日本軍の守備兵は、泉沢小隊と大国小隊と配属の分隊、それに国境警備の警察官を合わせても百名足らずの兵力であった。相手のソ連軍は近代化された兵力で、戦車と大口径火砲、飛行機で、兵力は約二万五千名であった。これでは、とてもじゃないが大人と子どものケンカどころではなく、赤ん坊と大人のけんかといった方がいい。

ソ連軍の最高司令部は、「八月十一日樺太国境を突破し、八月二十五日までに全樺太を占領せよ」と、北樺太の第十六軍司令官チエレミソフ少将に命令を下していたのである。

国境から約四キロほど南に下ったところに半田川があり、この川岸の手前に中央軍道を挟んで、両側に小規模の陣地が点在している。この半田陣地に大国武夫少尉と泉沢少尉の二個小隊が防備についていた。

ソ連軍の尖兵となってここに突入して来たのは、戦車五輌を先頭に火砲五門をもつ一個中隊の兵力だったが、大国・泉沢小隊は速射砲を連射し、挺身斬り込み、肉薄攻撃をもって縦横無尽に暴れ回り、欧州でドイツ軍と戦って勝ち誇るソ連軍の進撃を完全に阻止したのである。

古いノートから ①

稲倉石の思い出つづり

〔12〕

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

ニシン場の　A7　出日

―（昭三十八・三記）―

寂れたとはいえ、積丹といえばやはりニシンを思い出さずにはいられない。

それほどまでに積丹とニシンは切っても切れない関係が続いていた。

全盛の頃とは到底比ぶべくもないが、今でも時折り、迷い込んだニシンが、わずかながら陸揚げされる事がある。

そんな時、鼻唄まじりでニシンを開き海辺に乾かすアネサンの手さばきは、生き生きと手際よく、昔の面影がそこに残っているようだった。

磯の香りとニシンの匂いが辺り一面を包み、鴎が飛び交いながらそれを狙っている。

魯のきしむ音がかすかに響くこの風景は、往時のそれと変わりはあるまい。

そんな淡い思いに浸っていたのに、若者が乗ったデラックスな車が、アネサンたちの鼻唄をさえぎり、埃を巻き上げて突っ走って行った。

ニシン御殿

―（昭三十八・四記）―

一夜にして巨万の富みを手にし、わし掴みの札束を胴巻きに捻じ込んでは、小樽や札幌の料亭で、大盡・豪遊の限りを重ねた旦那衆の面影を残す「ニシン御殿」が、土台が傾き、朽ち果てた姿で今もローソク岩を望む磯辺に建っている。

網元が、赤銅色をした数十人の「やんしゅう」を顎で支配したであろう豪華な建物を、誰れ言うとなしにこう呼ぶようになった。

建物の大きさ豪華さが、網元親方の財力を示したらしく、我も我もとその大きさを競いあったらしい。

間口・奥行きとも十間余、総二階の建物。天井まで筒抜ける煙り口。細かい格子戸を廻らした窓。全体がどっしりとした感じである。

だが、豪華を誇ったこの御殿も、今では屋根が傾き、隙間だらけの姿をさらし、昔のままの面影を残しているのは、ごくごく珍らしいそうだ。

廃墟と化した御殿は、貧富衰盛の人の世をじーっと見つめているようでもあり、ニシンとやんしゅうで湧きたった、往時を偲んでいるようにも思われた。

老人と海

―（昭三十九・五記）―

「一夜明けたら大富豪」といわれた程に、ニシンの豊漁でにぎわった積丹一帯も、ニシンの不漁とともに、今では女と子供と老人ばかりの侘しい寒漁村となってしまった。

働き手の男は、現金収入を求めて、厳しい遠洋漁業や遠い内地での土建工事に出かけているらしい。

ある晴れた日。海辺で網の手入れをしている老人にカメラを向けたが、私の存在など一向に気にもせず、セッセと網をつくろい続けていた。

時折り、曲がった腰を伸ばし海の彼方を眺めていたが、きっと、ニシンで明け暮れた若い頃を思い出しているのだろう。

その衰えた眼差しと深い額の皺に、苦労の歴史が刻まれ、時代の移り変わりの激しさを物語っているかのようだった。

ふるさと便り

真紅に燃える母便り

吉川　義雄

便りけれモイ少しとれた母便り

私の所属する海軍航空隊が、国内を次第に南下し始めた頃、母からのふるさと便りは、封筒の色が突然アッというような、真紅になって私を追いかけて来るようになった。

こんな封筒なんか売っているわけはないし、母の手製であることは当然であるが、当初は何で私を恥ずかしい目に合わせるのか、母の真意が分からず、いささか当惑気味であった。

最新式の艦上爆撃機彗星が出来上り、四国の松山で部隊が編成され、霞ケ浦から、私もそこに駆けつけた。ちょうどそんな頃であり、行く行くは南方に進出することは目に見えていた。

以来、移動の激しい航空隊を追いかけて、真紅の封書は母の便りを確実に私のところに届けてくれた。

母の慈愛は、まるで私の行く手を知っているみたいで、部隊の甲板（庶務係）も、宛名を見なくても「おふくろさんが来たぞぅ」と、私にその封筒を渡してくれた。

それがただごとと思えなくなったのは、部隊の中でも、私は彗星が必要とする高オクの燃料の担当者で、常に先遣隊にいたからまともな部隊名も、それどころか常に本隊から遠く離れていて、便りをもらえる者なんか誰もいなかった。そんなところにも、真紅の封筒だけは私を追いかけて来て、私だけでなく戦友たちを驚かせた。

荷物が多くて、せっかく用意した飛行艇が無駄になり、鹿児島から巡洋艦鹿島で南方に向かった。図体ばかり大きいが、イヤになるほど船足の鈍い艦に便乗してしまった不運をあきらめ、轟々（ごうごう）と荒れる黒潮の上で母からの古平便りを繰り返し読んだ。

沖縄が攻撃される前だから、周囲の海中には敵の潜水艦がウヨウヨいた。何度も魚雷が襲って来た。その度に戦闘ラッパが艦内に響き、爆雷の応戦が続いた。海上に高々と盛り上がる水柱は美しくさえ見え、感動もしたが、便乗しているだけのお客さんだから何もすることはなくウロウロするだけ。無事に台湾の基隆港にたどり着いたときは疲れ果てていた。

ケラケラ鰊少しあったと母便り

二十人ほどの先遣隊は、ひとまず台北の旅館に上がり、安着祝いのドンチャン騒ぎを誰はばからず夜中まで繰りひろげた。泣きながら。

用意された五台のトラックにすべての機材を積み終え、部隊は台湾を縦断して一路南下し、遂に最南端の恒春に到着した。

滑走路一本のみじめな隠れ飛行場があり、そこに本隊を迎える用意をすることになった。

エライ作業になるぞと、覚悟して下見を繰り返している最中、ある日、大陸の方からトテツもない編隊の大空襲があった。戦爆連合六十機という集団で、生まれて初めて爆弾の雨とグラマンの超低空の機銃掃射を受けた。地響きで身体がハネ上がり、十八ミリの銃弾が、今にも身体を砕くかと思われる至近で黄土をはね上げた。生命が無事だったのが不思議なくらい。飛行場はきれいに無くなっていた。

その時から先遣隊は、台湾の孤児となり、終戦まで台南航空隊に所属することになった。

そうしている時でも、真紅の便りは私を追いかけて、三通も私の手に渡った。

手かご

竹内コト

私たちが何気なく使っていた日用品のひとつに、手篭があります。手篭は常に人のいるところにあって、何仕事をするにしても、それはよい生活相手でした。

浜へ出る時、畑仕事で山へ行く時、手篭に仕事に必要なものを入れて行き、帰りは魚や畑のものを入れて持ち帰る生活の必需品でした。

今のようにビニールの袋もありませんでしたし、段ボール箱などは貴重品でした。母は畑仕事を日課のようにしていましたから、畑に行く時には必ず手篭を持ち、畑仕事のあとで菜っ葉やねぎ、さやえんどうなどを採って家に帰ったものです。秋のいも掘りになると子どもたちはみんな手篭を持って、母が掘ったいもを拾い集めた記憶があります。

春になって、山へアサズキやヨメナを採りに、よく手篭を持って歩いたものです。また、お盆の盆菓子など、仏前にお供えするものを買いに行くときは、新しい手篭を持って店に行きました。今ではそんな習慣もありませんし、もちろん竹で編んだ篭などは見ることもなく、無駄と思えるようなりっぱな包装に変わりました。

時代と共に、次々と昔のものは消えていきますが、私たちの時代にはほとんどが手造りでしたから、いま思うとぬくもりがありました。よく、手篭に入れて知り合いや近所にものを持っていくと駄賃を貰って、それがまたうれしかったことが、今は懐かしく思い出されます。

雑感さまざま

渡辺ハツエ

燃えないゴミの収集日になると、ゴミ置きの指定場所へ出されたあるある大型粗大ゴミ、いろいろですが一見して、修繕すれば十分再利用出来るのでは、と思うのは私のいらぬお節介でしょうか。現在はあらゆる物資が豊富に出回っていて、すべてのものが使い捨てにされているのが現状のようです。

戦中派の私は、思い出される人もいると思いますが、『欲しがりません勝つまでは』と、物資の不足に耐えてきた時代もありました。老い先短い年齢になっても、ものを大切にするという根性は少しも変わりません。悪く言えばケチな性分かナとも思っています。何もかももったいないと、ゴミと仲良く共存しております。

けれども最近は、自分の生きざまを反省しております。自分が不用になった身の回りのものが、すべてゴミになるのだと思えるようになりました。ゴミを残しておいて、家族に迷惑をかけてはならないのです。

今は子どもの成長に合わせて、自転車が市販されておりますが、昔は、子どもも大人用の自転車に乗っていました。サドルからは足が届かないので、三角形のフレームの間から足を入れて、両方のペダルを踏むのです。こうゆう乗り方を三角乗りといっていましたが、器用に乗っていたものです。相当の練習が必要だったのでしょう。それにしても、昔の子どもたちは根性があったと思います。ほかにも、自分たちの遊びをいろいろと工夫して、何の道具が無くても楽しく遊んでいました。

亡夫もよく子どものころの遊びを楽しく話していましたが、私もいま、昔のことを懐かしく思い出しております。

古平ホトトギス会

菩提寺の庫裡の新築秋高し　斉藤波留
紅葉の名所巡りのプラン練る　仲谷比呂子
古里の父母見てゐるや今日の月　仲谷安代
叩いても夕餉気になる秋の蝿　福井幸平
肌寒しカーデガンでも羽織うか　山口悦子
生き方のその時まかせ鰯雲　大和田絵伊
八十路には尚もきびしき残暑かな　大島喜恵
敬老日心つくせる祝膳　仲谷美砂
秋草を活けてピアノに飾り置く　山口　浪
烏賊釣の沖休みたる盆踊　水見句丈
達磨忌や座して眺める面壁図　越野敏雄
波洗う奇岩の上の草紅葉　岩瀬みのる
藤の花垂る砂場にも暫し寄り　中村樺宵
灯台の灯り寂しき夜の秋　越野清治
風鈴のかすかに鳴りて風渡る　外山俊久
亡父偲び逆縁忍び盆の月　西島サツ子
夏休みほっかいどうのおばぁちゃんと　小五水見翔人
しゅくだいをすこしずつしてなつやすみ　小一水見玲央

川柳

難民を支えきれない世紀末　北　政道
外交は脅し文句も巧みなり
懸命に生きて明日へ夢つなぐ　石井愛子
火の牛も変わり目早い世に喘ぐ
ことばにも味を加えて老いひとつ
漬物に明日の夢をきざんでる　渡辺ハツエ
ゴミの山ぶんかの発展己が罪
病んでます地球あちこち傷だらけ

▽『せたかむい』の発行を心待ちにしている方もおられて、なんとか一日発行と決めているのですが、いつも遅れがちで申し訳ありません。

▽ご覧になった方から、いろいろと感想をいただくことが多く、ありがとうございます。

▽特に町外に出ている方からは、ふるさと・古平からの便りとして、大変懐かしいという感想がありました。

▽ある町内の方から、「家族や知人に、手紙代わりに送って喜ばれています。」というお話も聞いております。

▽町内に永く住んでいる方、また、仕事に経験の深い方は町の財産でもあります。折りをみてお話をお聞きしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

▽古い写真を集めています。昭和四十年代の写真でも貴重なものがありますので、何によらずお持ちでしたらお貸しください。複写してお返しします。

▽みなさんのご意見やご感想など聞かせてもらえると参考になります。お待ちしております。